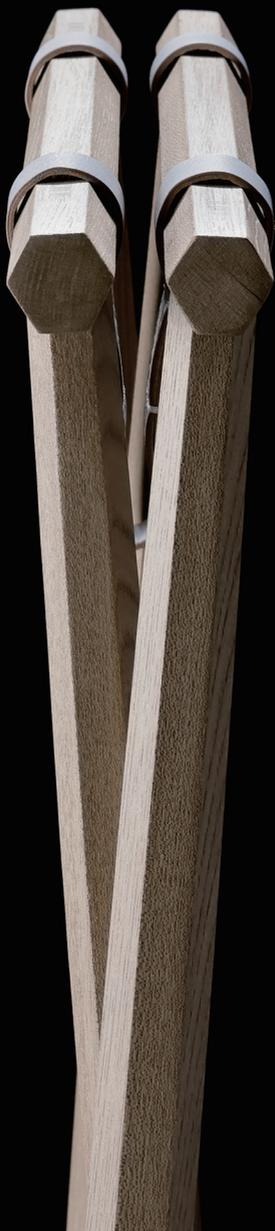


盛夏



1101111

おかげさま

五色の職人

菅原雅重

「職人さん」。この言葉には何か特別な響きがあります。高度な技への尊敬の念と、仕事に向き合う実直な気概。

しかしながら、「考える事」と「作る事」の分業化が進む現代において職人の技を発揮する機会は減少していると言わざるをえません。

古来、職人はただの作業者に留まらず、自ら考え・学び、自らの手によって物を作り、文化を支えてきました。

設計者と施工者
ホワイトカラーとブルーカラー

この間を繋ぐために、現在とても沢山の「人と物と時間」が使われています。それは、大型スーパーに並ぶ規格に準じ大量生産された商品の販売形態と同じものがあると感じています。

建築においてはこの隔たりを改善するために、我々つくり手である職人が五色の布を纏う必要がある。そう考えています。

私が大工の道へ進む事を決めたのは一冊の本との出会いでした。

『現代棟梁・田中文男』。現在も事あるごとに読み返すその本の中で

「人（考える）・金（予算）・時間（工程）・物（材料）・己（つくる）この五つ全てが中世では大工の考えるべき対象であった。」

「二十一世紀における私からの言葉は、失われた設計図書と施行技術をつなぐ技術体系を新しい視点で再構築する。その一言に尽きる。」

と田中氏は言っておられます。

これからの職人にとって重要な事は、先人から受け継いだ技術で自分を囲い

込むことではありません。

確かな技術を持ち、職人自らが思考して設計者・顧客、地域、そして社会に自ら働きかける事が、失われた技術体系を再構築するための一歩になると考えています。

普段、我々は考えて仕事をしていると思っではいても、それは与えられた仕事（図面）のつくり方を考えている事が殆どです。

「つくり方を考える」のは職人として当たり前のことです。「考えを持つてつくる」この行為が新しい職人には必要です。

なかなか簡単な事ではありませんが、若いメンバーの多いおかげさまで、仕事を伝える際は大枠だけを伝え、後は任せる事を意識しています。

与えられた役割の中に、その人なりの考える余地を残すことが必要で、それが仕事（思考）の振れ幅を大きくする事に繋がっていくものと考えます。

全体を意識し自ら必死で考えやり切った仕事は、部分的に見るとふぞろいな仕事と映りますが、それぞれの色が重なりあつた仕事は全体として調和の取れた美しいものとなる。そう信じています。

古い日本の建築には部材の寸法や納まりなど、部分によってかなりの違いがあります。

しかし、長い年月を経た今でも人を魅了し続けています。

おかげさまでメンバーそれぞれの色が幾重にも織り重なる事で組織を織り上げ、そこから作り出されるものが、地域と社会、未来へ色褪せることなく貢献できる事を目指しています。



中札内西戸蔦神社



経年の劣化と自然災害により損壊してしまった中札内西戸蔦神社の社殿を設計から施工、設置しました。

浄蓮寺本堂 屋根修復工事

模な修理の際に大幅に費用を抑える事ができ、結果としてそれはお寺が長く存続していく事の一端を担うものと考えています。
大きく荘厳なお寺はもちろん重要ですが、少し小さくとも開かれた雰囲気のお寺はこれからの社会には必要になると感じています。
屋根の形状を大幅に変更するのに伴い、専門的な知識と技術が必要とされる工事となりましたが、全ての工事を地元職人だけで行っている事を誇りに思っています。
工事はもう一息で完了しますが、最後まで気を緩める事なく、しっかりと完成を迎えたいと思っています。



1



2



3



4

- 1 木材にはエゾマツを使用。扉部には縁起が良いとされるイチイ（樹齢150年）を使いました。
- 2 主材料として使ったエゾマツは丸太から仕入れ、自社で製材、加工を行います。
- 3 柱と桁との間に若干の隙間を作り組み上げます。時間が経つにつれ屋根の荷重がかかり10数年後にはこの隙間がなくなる計算です。
- 4 搬出作業の様子。

現在、浄蓮寺（清水町）本堂の屋根修理工事を行なっている最中です。
最初に今回の工事の話を受けてから、まず現地調査をしました。そして構造・材料・予算を踏まえ、どのように修理を進めていくべきか、お寺の今後を視野に入れないで考えました。
大きくて立派な屋根はお寺を象徴するものですが、その維持管理には多くの費用が必要になってしまいます。
「つぎの世代のために、しっかりとお寺を受け渡す」
檀家さんに向けた説明会では、この事を一番に考えたいと話をし、現行の入母屋造りの屋根を寄棟造りへとそっくり作り替える案を提案させて頂きました。
今回の工事で屋根の装飾を減らし、屋根面積を減らす事は、再び訪れる大規模な修理の際に大幅に費用を抑える事ができ、結果としてそれはお寺が長く存続していく事の一端を担うものと考えています。
大きく荘厳なお寺はもちろん重要ですが、少し小さくとも開かれた雰囲気のお寺はこれからの社会には必要になると感じています。
屋根の形状を大幅に変更するのに伴い、専門的な知識と技術が必要とされる工事となりましたが、全ての工事を地元職人だけで行っている事を誇りに思っています。
工事はもう一息で完了しますが、最後まで気を緩める事なく、しっかりと完成を迎えたいと思っています。



上 解体前の入母屋造りの屋根
中 新しい隅木を取り付ける作業
下 加工中の隅木

2 玄翁 げんのう

玄翁は大工にとって欠かす事の出来ない道具の一つです。今から600年以上昔に悪霊の取り憑いた石を玄翁和尚が

金槌で打ち砕いたことが、その名

まうのです。教える際はその加減を言葉で伝える事が難しく、「もうひと削り」といった感覚的な言葉で伝えざるをえません。また玄翁の柄の部分は使いながら、自分で少しずつ削り形を整えていきます。そうするこ

前の由来になっ

ています。大工は自分の道具を自分で仕込むところから始まります。

弟子に入って一番最初に仕込む道具が玄翁なのです。

頭の部分だけ渡され、持ち手の柄の部分は自分で玄翁の穴の大きさに木を削り合わせなければなりません。

仕込みがキツいと上手く頭の部分に入らず、緩いと使っているうちに頭が抜け落ちてし

とで

各自が握りや

すい様に工夫する。

それと同時に、職人として格好の良い道具を持ちたいという心がうまれてきます。

道具を見ればその人の腕前が分かりますが、玄翁はその個性がよく現れる道具の一つだと言えます。



〈つくるもの〉 神代楡の木製トレイ、スタンド



パリを拠点に活躍する佐藤伸一シェフから依頼を受けてデザイン・制作したトレイとトレースタンドが完成しました。ミシュランガイドの常連である佐藤シェフが新規オープンするフレンチのレストランで使用される為、単純な和風にならないよう、かつ我々宮大工がつくる意味を考えながら、何度もやりとりを重ねデザインを進めました。材は偶然にも手に入った、北海道の地に数百年眠っていた神代楡を使用。トレイには白銀比と魯半尺を用い縁起の良い寸法を取り、トレースタンドの脚の部分は箸をモチーフにデザインしました。世界的にも注目されているレストランのオープンに関わらせて頂けた事は、おかげさまでととても貴重な経験でしたし、何より小さな町から世界と渡り合う、それを少しでも実現できた事は少なからず自信となりました。

牛舎の記憶をつむぐ家



家の中央には校倉造の
収納があり、家財道具は
この中に保管します。

共同設計 / 安田建築設計事務所

1



2



3



- 1 設計は感性の豊かな若い二人とチームを組み進めていきました。
- 2 建物の屋根を支える垂木は不揃いに並べ、継手・仕口が室内外に現れるようにしました。
- 3 中西さん一家と柱材となる木を選びに森を訪れ、後日伐採しました。
- 4 建物の外に立つカシワの木から、内部で使う手すりの材料を調達、加工しました。

4



音更町でパンとコンフィチュールの
お店 t o i を営む中西さん一家の自
宅が完成しました。

兵庫から移住し、2019年に畑に
囲まれた丘の上で中西さん夫婦がほじ
めた t o i は、いまや遠方よりお客
さんが訪れる人気店となっています。

そんなお二人から、今は自宅から離れたお店
中心の生活になってしまい、子どもたちと過
ごす時間があまり取れないので、お店の敷地
内に自宅を設計・建築して欲しいと依頼され
ました。

敷地の小高い場所には古い牛舎が立ってお
り、その場所に牛舎の記憶を残したものを建
てて欲しいとの事でした。

牛舎をリノベーションする方法もありまし
たが、今回は牛舎を一度全て丁寧に解体し、材
料と向き合いました。

一般的には図面に合わせて材料は加工されま
すが、今回はそれは逆の考えで設計を進め
ました。解体した際に手に入れた材料は切ら
ずに最大限に利用する事に決め、その材料に
合わせ設計を進めました。

不均一の古材の使用のほかにも、森に家族全
員で木を伐りに行ったり、建物の脇に立つカ
シワの木の枝を手すりに使ったりと、建てな

がら材料と向き合い・考え・作り、再び考え。
考える事と作る事がとても近い関係で進んだ
事により、不思議と不揃いでありながらもま
まりのある建物となりました。

この建物の一部は、ギヤラリーや楽器の演奏
など多用途に活用できるフリースペースとな
っています。

美味しいパンと共に、どんな時間が生み出さ
れるのか、今からとても楽しみです。





その在学中におかげさまのこ
とを知った。

「なんかすごいことをやって
いる人が帯広にもいるんだな
という印象でした。菅原さん
の宮大工の技術はもちろん、
地域や人、材料など考えてい
ることの深さに興味を持ちま
した」。

おかげさまでは3年前から広
報関係の仕事を主に行ってい
る。「まだ大工としての経験
が浅く、ここで大工として貢
献することはあまりできない
けど、今までやってきたこと
が活かせるのは嬉しい」。ま
た、働くペースを自由に調
整できること、アイデアが詰
まった独創的な仕事に関わる
ことができるのが、齋藤さん
がここで働く魅力だという。

住宅用の外壁として北海
道産のエゾマツを自社で
焼き板に加工しました。



あとがき

百年後の職人はどんなだろう？

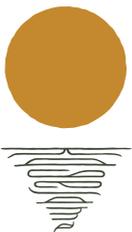
最近、よく頭をよぎります。
ものづくりの職人が居なくなる事は無いとは思いつながら、
想像を超えるスピードで進化していくテクノロジーを目の
当たりにして、職人がどのように存続していくのか、少し
想像ができません。

おかげさまでは、忘れ去られた古い技法（木割製材・焼き
板）を再び試みたり、難解とされている、大工のさしがね
使いの理解にデジタルでアプローチして、規矩術のアプリ
を考えてみたり、アナログとテクノロジーの両方を行き来
しています。

不易なものを守り続ける努力と
変えるべきものは変える勇氣
そしてものをつくるのが好きだという無垢な気持ち。
それが未来へつながる小さな一歩だと信じて
日々仕事にむかっています。



東京大学・函館みらい大学と共同で、規矩術を簡単に使いこなすアプリを開発中。先生・学生・大工さんが参加したワークショップの様子。



「おかげさま」は多様な由来を
持ち、「陰と陽」つまり「光
があるところには影ができる」
という意味合いもあります。

輝く朝日や夕日、月光の下で
は影ができるように、わたし
たちは人々の集まる「場」の
裏方として、つくり、守り、
支えてゆくという大切な使命
をこのしるしに込めています。



株式会社おかげさま
帯広市東三条南八丁目十六番地一
電話：〇一五五―六七―五八六一
FAX：〇一五五―六七―五八六二
<https://okage-sama.com/>